映画『長春』

江沢民はこうして法輪功を迫害した

法輪功の迫害手法が香港やウイグルでも展開されている

ジェイソン・ロフタス
映画監督
ダーション（大雄）
コミック・アーティスト
聞き手／大高未貴
翻訳監修／鶴田ゆかり

一九九〇年代、江沢民国家主席（当時）は、法輪功を学ぶ者の数が中国共産党員の数を上回ることを危惧、一九九九年から弾圧を開始する。当初、中国の人々は法輪功に同情的で、弾圧運動は広がらなかった。そこで当局は天安門広場での法輪功学習者の焼身自殺を捏造、法輪功に対して悪印象をつくり上げ、迫害を正当化し始める。

二〇〇二年、国営メディアに中国の人々が騙される状況に危機感を覚えた一部の法輪功学習者が、長春（吉林省。人口約九百万人）のテレビ回線をジャック、法輪功の真実、迫害の実態を示した映像を流す計画を実行。ジャックに成功したが、中国当局の追及の手が厳しく、実行者が次々逮捕・拷問を受ける。そして、最後には……。

そんな映画のような事実をアニメーションとドキュメンタリーを組み合わせて描いた、映画『長春―Eternal Spring』が完成した。事件の二十年後に生存者や目撃者を訪れ、自らのペンで事件を再現した長春出身のダーション氏と、その画像をアニメ化、インタビュー過程をドキュメンタリーとして制作したジェイソン・ロフタス監督（カナダ在住）に、作品、そして中国の人権状況について話を聞いた。

映画『長春』の一場面（画像提供：LOFTY SKY PICTURES）

声を上げることが大切

大高　映画『長春』を拝見しました。大変興味深い内容でしたが、制作するきっかけは何だったのでしょうか。

ロフタス　さまざまなプロジェクトを進めていましたが、ビデオゲーム『シューヤン・サガ』（書雁傳奇）の制作のため、ダーション氏を招いたのです。ダーション氏は『ジャスティス・リーグ』や『スター・ウォーズ』のコミック版、また中国の武俠小説の第一人者である金庸氏の挿絵も描いており、このプロジェクトにはうってつけでした。ダーション氏と一緒に制作を進める過程で、ダーション氏が私の妻と同じ長春出身であることがわかりました。

私の妻は、父親が中国政府の高官であり、反体制派や迫害を受ける人々とは無縁でした。彼女にとって、同じ長春出身のダーション氏の話は衝撃的で、この話を伝えたいと思うようになりました。

大高　法輪功のことを知ったのはいつ頃ですか。

ロフタス　一九九〇年代の終わりです。高校時代で、東洋思想や瞑想に関心がありました。中国での法輪功弾圧が始まる前に、法輪功のコミュニティーとは出会っていました。

そうしたら迫害が始まり、ニュースが流れてきた。まだ高校生で中国の政治のことはよく知りませんでし

映画『長春』のチラシ

たが、法輪功は実に邪悪な集団であり、撲滅しなければならないという中国政府の言い分は、自分が体験した法輪功コミュニティーとはまったく違う印象を受けました。そこで法輪功の人々に関心を抱き、同情もし、人権的な立場から迫害の話を伝えたいと思うようになったのです。

大高　ロフタス監督の奥様は中国人なんですね。いつ出会ったのですか。

ロフタス　学生時代、カナダのトロント大学で、国際研究プログラムの一環として中国とカナダの国際関係に関する会議が催されました。そのプログラムで修士号を取得するため、妻は数カ月前からカナダに留学していたのですが、偶然にも私の隣に座ったことで、それから私たちの〈カナダと中国〉の関係が始まりました（笑）。

大高　奥様は政府高官の娘だった。

ロフタス　妻の両親はカナダに移住し、同じ地域に住んでいました。義父はすでに亡くなりましたが、義母は健在です。ですから直系の親戚は中国にはいません。しかし、彼女は「中国にはもう戻らない」という気持ちを固めています。義母は姪の結婚式に参列したかったのですが、中国の親戚から戻らないようにと忠告されました。帰ったらおそらく人質としてとらえられ、妻を中国に引き戻そうとするでしょう。ですから義母も妻も中国には帰れません。

妻は、法輪功のコミュニティーにはかかわっていませんが、中国人が共感できる話として、この話を語ることは大切だと固く信じています。自分の国で何が起こっているのか、人々がどんなことに直面しているのかを知らせる必要がある。リスクやプレッシャーがあっても声を上げることが大切であると、妻は感じています。この話に出てくる一人ひとりの勇気に妻は心底、感動しています。私自身もこれらの人々に対するはるかに高いリスクを考えたら、中国の人々のために映画の制作を続けるべきだと思ったのです。

体験や痛みを作品に

大高　法輪功迫害やテレビジャック

の話を聞いたときは、どのように思いましたか。

ロフタス　法輪功に対する迫害も、法輪功のコミュニティーもよく知っていましたが、この話を聞いた時、いくつかの層があると感じました。

テレビのケーブルをハッキングしようと思いつく当事者の勇気、創造性。我々が求めるレベルの高いストーリーの要素がありました。そして現在、起こっている現実的なおぞましい人権の話でもある。銀行強盗ではなく、何かを露呈し、多くの人に知ってもらうための行動です。これらの要素に加えて、才能あるアーティストが故郷を離れ、痛みを抱えている。その痛みをアートで表現する。これが出発点でした。

アニメとドキュメンタリーでは、制作過程が全く違います。アニメには原稿があり、台本を仕上げます。次の段階に進む前に固定されます。そして、個々の撮影のための絵コンテが作成されます。この絵コンテを動画にしていくのです。つまり、絵コンテから映画を作成します。アニメ制作の前に、何をしたいかが明確に把握されているのです。アニメ制作には時間と労力を要しますので、細部にわたっての事前の計画が必要です。しかし、ドキュメンタリーでは全く異なります。何百時間も撮影した後で、編集作業に入ります。必要な部分を切り取りながら、自然体で浮かび上がってくるストーリーを探します。

今回の映画では、この二つの過程を同時にやりたかったのです。ダーション氏が自分の内面を探る過程を全て撮影したかったので、彼にどうすべきかを言うことは一切ありませんでした。ただ、描いてもらいました。それが映画にどう収まるのか、全く予想できませんでした。過去の苦しみを自分自身で探索していったのです。彼が筆とペンで描いた、逃げようとして走る白黒のシーンがありますよね。映画では後のほうで出てきますが、あの絵が、彼が描いた最初のものでした。

この問題を思い起こし始め、その時の気持ちを思い出して、あの絵が生まれました。自分が経たトラウマ全てを吐き出したのです。どんな原稿にも収まりません。ですから、ダーション氏が自分の体験を語り、自分の手で描き出し、見ている人に彼が描いているプロセスを体験してもらう手法を模索したのです。

大高　ダーションさん、当時の記憶

ジェイソン　ロフタス
カナダ出身。ピーボディー賞受賞の映画製作者。カナダ・スクリーン賞候補４回。『長春―Eternal Spring』はエリック・ペディセリとの共同制作『Ask No Questions』に続く２本目のドキュメンタリー。

はまだ生々しく残っていますか。

ダーション　私には記憶もあるし、作品にする力もあります。ところが、記憶と作品には食い違いがあります。黒澤明の映画『羅生門』では、一つの場所に人々が集まって、一つの事件を話し合うシーンがありますが、それぞれ見方が異なります。私の場合は絵を描くことができるので、その角度から見た法輪功学習者の迫害の実態だととらえています。特に、私は街の雰囲気をとらえることがうまいと思っています。

映画『長春』を長春の観光映画にするつもりはありませんでした。当時、私が経験した長春の雰囲気を醸し出すようなアニメーション作品をつくることに腐心しました。迫害やその痛みなど、体験は人それぞれで違うと思います。私が今回の作品で力点を置いたのが、当時の私の体験や痛みをどのようにして作品に落とし込めるのか、そこにありました。

実は一つうれしいことがありました。長春出身で、今は海外に住んでいる法輪功学習者が、映画を見て、とても臨場感があると感想を伝えてくれたのです。ほかの方々が映画を見て、どのような感想を抱くのかわかりませんが……。

大高　ダーションさんはテレビジャック事件の後、北米に亡命された。

ダーション　ええ、米国を中心に住んでいますが、芸術家という特殊技能のおかげで移住することができました。今回の映画を機にカナダに行くことも増えています。

迫害に光を当てる

大高　映画『長春』を制作する際、中国当局からの接触はありましたか。

ロフタス　実はこの映画の制作中に、中国大手ＩＴ企業のテンセントが、ダーション氏と一緒につくったビデオゲームをリリースするところでした。ところが、発売直前にサイトから突然、消えたのです。テンセントの担当者に問い合わせたところ、中国当局から私との関係を断て、との指示があったとのことでした。

「ゲームの内容に問題はない。すでに中国の二つの省の検閲は通っている。あなたの会社の問題のようだ。中国政府の路線ではないことをしているのか？」と尋ねられました。

大高　それは衝撃的でしたね。

ロフタス　それと同時に、長春の国家安全局が妻の親戚に嫌がらせをしました。人権問題、法輪功の迫害問題は、中国では敏感な題材です。この問題に触れれば、何かしらのことが起こるのはわかっていました。しかし同時に、映画制作を通じ、私たちとは比較にならないほど酷いことに直面してきた人々と出会っていました。ダーション氏は中国で収監され拷問された。この映画で証言している人たちは、拘束中に想像を絶する過酷な目にあっています。命を落とした人たちもいる。

ですから、たとえ、どのような脅

ダーション
中国出身のコミック・アーティスト。『スター・ウォーズ』『ジャスティス・リーグ』のコミック版などを描く。著名作家・金庸の武侠小説の挿絵も描いている。テレビジャック事件の後、中国東北部の故郷・長春から逃亡。自分のイラスト技術を通じて、この事件をたどり、中国を脱出した唯一のテレビジャック当事者を訪問した。

しがあっても、私たちは言いたいことが言え、信じたいことを信じることのできる場所にいます。この自由を行使することができます。過酷な体験をした人たちが発言できる機会を設けることはとても重要なことだと思ったのです。

大高　カナダには中国人の移民が多く、中国当局のスパイも多く入り込んでいると言われています。身の危険を感じたことはありませんか。

ダーション　私はジェームズ・ボンドではありませんから、誰がスパイかはわかりません。ただ、確かにカナダには多くの中国人がいます。彼らの多くは警戒心が強く、中国当局のスパイがいるのではないかと緊張感を持っています。

ロフタス　この事件の生存者へのインタビューを通して学んだことがあります。中国南部出身の男性でしたが、収監され迫害を受けました。ある時点で、看守の態度が和らぎ、最終的に釈放されました。後になって、国外にいる家族が政府高官に働きかけ、自分の名前が人権に関する報告書やメディア報道に出るようになり、国外で自分に対する迫害が注目されていることを中国国内の高官たちが知ることになったことが理由だったとわかりました。

映画の中で証言することで身の危険にさらされるのではないかと、映画に出た証言者たちに尋ねたのですが、一律に「中国国内ですでに真実を語っていた。国外にいるのだから以前よりは安全だし、中国国内の状況を改善するには、発言することが一番だ」と答えていました。

私自身も『ウォール・ストリート・ジャーナル』で、いかに中国側の人間が自分の代理店や家族に圧力をかけたかを語った後で、嫌がらせを一切受けなくなった経験があります。中国当局は我々がプレッシャーに対してどう反応するかを見ていて、脅迫にひるんだら弱みにつけ込み、自分たちの思い通りにさせようとします。彼らがやっていることを公にすれば、彼らにとっては厄介な事態になるからです。迫害に光を当てることは、今も苦しんでいる人々の助けにつながるのを、この映画で出会った生存者から学びました。

最悪の人権状況

大高　中国の人権状況は以前と比べてどうでしょうか。

ダーション　最悪です。ここ数年、

法輪功学習者に対する迫害が香港や新疆ウイグル自治区でも同じように展開されています。コロナが蔓延し、ロックダウンが始まると、中国全国民に迫害をしたも同然となりました。いつ、自分たちの身に迫害が降りかかってくるかわからない状況です。さらに法輪功学習者に対して実行した臓器狩りも、今ではさまざまな団体や若者が対象になっています。

大高　臓器狩りされる人々は増えていますか。

ダーション　ええ。しかも、今は法輪功学習者だけでなく一般人にまで及んでおり、十代の若者が突然、失踪する事件が後を絶ちません。一人ひとりのDNAを検査し、人体のデータバンクとして蓄積、合致したら高齢の政治家や有力者の新たな臓器として移植されます。中国以外のほかの同盟国や友好国などの高官やセレブたちにも臓器が提供されています。

大高　中国の若い世代はその実態を知っていますか。

ダーション　みな知っています。毎月のように報じられていますから。風邪をひいたために病院に行き、診察を受け、病院を出たあと、突然、交通事故が発生するケースもあります。中国人の間では周知の事実ですが、声をあげることはできません。

大高　共産党幹部の子供であれば拉致されることはないのですか。

ダーション　当然です。それ以外の子供たちが狙われており、まさに「人間の鉱山」です。中国人はみな、自分たちが鉄鉱石のように臓器を抜き取られる可能性があることを理解しています。

強制収容所など、人々をどのように統治したらいいのか、その知恵は、すべて法輪功迫害から中国当局は学んでいます。

大高　対抗する術はないのですか。

ダーション　私たちは対抗しています。台湾も対抗しています。対抗する人は昔も今も存在しています。映画『長春』をつくったのも、その一端です。映画がなければ、長春であった事件の全容を知ることはなかったでしょう。中国では映画『長春』のことが毎日、どこかで話題になっています。

大高　マレーシアに亡命し、殺害された中国人もいました。

ダーション　東南アジアは亡命中国人にとって危険な場所です。中国人がビザなしで渡航できる場所は、すべて危険なところなのです。

大高　カナダもそうですか。

ダーション　米国同様、危険です。中国当局による暗殺事件が何件も発生しています。米国在住の画家、華涌氏は謎の死を遂げました。今でも原因不明です。

同じく米国在住の風刺漫画家、辣椒氏には中国当局からの接触がありました。「いい漫画の契約があるから」と東南アジアに呼び寄せようとした。でも、それは中国当局の罠であり、東南アジアで拉致しようとしたのです。同じ芸術家に対しての事件ですから、多大な関心を抱いています。

大高　ダーションさん自身、命の危険を感じたことはありませんか。

ダーション　わかりませんね（笑）。ほかの職業の方がどのような迫害を受けているのかも知りません。

大高　映画『長春』を通じて顔と名前が知られます。中国当局の監視の目も、より厳しくなるのではありませんか。

ダーション　確かに恐れていますが、迫害されることに恐ろしさを感じてはいません。それよりも私の使命が途中で終わることに恐れを抱いています。正義を実行し、それに応じて何かが降りかかってくることは仕方ありません。しかし、うまく実行できなかったらどうなるのか、その結果を恐れています。

大高　人権状況が厳しい中国ですから、さらに移民・難民が増える可能性はありませんか。

ダーション　すでに日本や米国に多くの中国人が逃げてきています。特に富裕層が多い。ただ、このような現象は中国だけでなく、ほかの国々でも発生していることではないでしょうか。

でも、逃げることは最終手段ではありません。逃げるのではなく、自らの足で立ち上がるべきではないでしょうか。すぐに逃げ出すような精神性を持っていたら、どこにいても同じ状況に陥るでしょう。

今回、映画『長春』に携わった理由の一つはそこにあります。「逃げるのではなく立ち向かえ」。それが一つのメッセージでもあったからです。

中国で上映を！

大高　映画『長春』は今後どのような展開を考えていますか。

ロフタス　今回の東京でのプレミア上映を入れて四十九カ国、北極以外の六大陸で上映しました。上映に伴って世界各地を訪れることができました。各国の方々からとても心が温まるメッセージをいただきました。地域によってメッセージはさまざまですが、普遍的に共通するものがあります。

私はダーション氏のように中国に住んだこともありませんし、拷問に耐えたこともありません。しかし、この題材は何か自分に訴えるものがありました。制作者として映画が普遍的なものをとらえるようにしたいと思うのですが、誰しも正しくないと感じることに遭遇したことがあると思います。声を上げるべきだけれども難しい。声を上げたら自分はどうなるのか。個人としてそれほど極端なことではなく、リスクもそれほど高くないかもしれません。でも、人間なら誰しも体験していることです。このストーリーはあらゆるところにいる人々が共感できる美しい話だと思いました。

日本で上映することは非常に重要です。特に日本は中国に近い。日本人は、中国共産党からの圧力、威嚇を理解されていると思います。これほど近くの国ですので、映画の内容を心から共感してもらえることでしょう。

大高　配信されれば、多くの人々の目に留まる機会が増えると思います。

ロフタス　国際的には、英国BBCのドキュメンタリーチャンネル、カナダのCBC、ドイツとフランスのアルテ、米国のバイスで配信されてきており、世界で二十一の契約があります。日本でも契約できることを願っています。

五月三十一日のプレミア上映会は満席で素晴らしかった。映像関係者が来場していた可能性があります。日本人のために、この映画が上映されることを強く願っています。

ダーション　監督が世界中に作品を広報してくれて、とても感謝しています。私が一番上映したい国が中国です。ただし、中国で上映したところで、当局にすべて奪われるので一円たりとも興行収入はないでしょうが（笑）。

※日本国内の次回上映は八月に広島を検討中。詳細は映画『長春』日本語版サイト（ganjing.one/3sUsl9FB）、フェイスブック、インスタグラム（いずれもeternalspring.jp/）にて発表。

おおたか　みき
一九六九年生まれ。フェリス女学院大学卒業。世界百カ国以上を訪問。チベットのダライラマ十四世、台湾の李登輝元総統、世界ウイグル会議総裁ラビア・カーディル女史などにインタビューする。『日本を貶める―「反日謝罪男と捏造メディア」の正体』（ワック）など著書多数。「サンケイ・ワールド・ビュー」（レギュラー）、「虎ノ門ニュース」などに出演している。